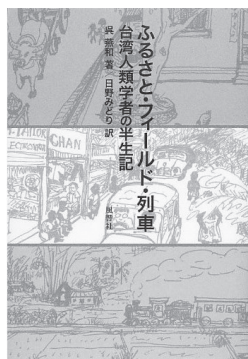


吳燕和著 日野みどり訳

ふるさと・フィールド・列車

——台湾人類学者の半生記

風響社／2012年11月／328頁／3000円



羽根次郎

吳燕和氏の名を聞けば、中華圏の人類学界で知らぬ者はいない。だが、そこまですれば、本書は単なる著名人物の自伝として総括できよう。しかし、氏は単なる人類学者というより、眼差しに映ったものを思考せずにはいらぬ思索者でもあると言うべきだろう。それゆえ、本書は自伝にとどまらぬ深みを有している。

まず、本書の構成については以下のとおりである。

日本語版刊行によせて

序（李亦園）

はじめに

第一部 南投のふるさと

第一章 祖母

第二章 中国小僧

第三章 古い家

第四章 一家離散

第五章 軍属居住区の台湾坊や

第六章 人類学との出会い

第二部 人類学のフィールド

第七章 中央研究院から台湾大学へ

第八章 「出国の詮議に及ばず」の

紆余曲折

第九章 ベトナム戦争下のアメリカ

人類学

第十章 ニューギニア

第十一章 噴火口の台湾坊や

第三部 列車の旅

第十二章 列車

第十三章 岩倉に寓居して

第十四章 よそ者の目に映る日本

第十五章 今浦島の台湾

訳者あとがき（日野みどり）

以上のように内容は多岐にわたり、各章逐一触れていくことは不可能であるため、部ごとに以下紹介していくこととする。

第一部では、北京から台湾の南投に転居した六歳の時から少年期を経て、大学受験失敗後の職探し、そして人類学との邂逅に至るまでの過程が描かれている。

一九四六年一〇月の転居当時は国共内戦において優勢にあった中国国民党が、著

者の小学校時代を通じて徐々に劣勢に、そして一九四九年の敗北に至る変化が、著者の日常生活の描写の中にいくつも垣間見えて興味深い。

少年期の著者の生活体験に関する叙述には、台湾内部の様々な多様性が溢れかえっている。北京や日本の要素が生活の中に存在し、さらには南・北台湾の差異といった台湾内部の多様性への自覚など、枚挙にいとまない。これについて以下少し詳述したい。

本書において、「北京」との比較の意味で言及されている「台湾」の象徴とはまさに、「南投の祖母」といつてよいであろう。北京訛りの国語を操り、華北の味に慣れた少年期の著者には、祖母の行動様式はいつも新鮮であり、本書でも極めて詳細に、またいきいきと祖母の姿が描写されている。著者は貫籍に従えば台湾人となるが、北京生活が長く、台湾人としてのイメージどおりに振る舞っていたわけではなかった。それゆえ、ひとたび台湾人であることが周囲に露呈するや、しばしば驚嘆の的となったので

ある。「本省人」でありながら楽しく過ごした眷村居住経験や、青春を満喫した「外省人」だらけの学校の思い出など、若き日の著者の目に映った「省籍矛盾」は、「民主化」以降の台湾での主流の「省籍矛盾」言説とはかなり距離がある。読者は想像力を刺激されることとなるろう。

また、著者は南投時代に経験した、運動会での騎馬戦の存在や、授業での教員の厳しさを通して、日本の要素が残存する地方の姿を描き出している。外来者とは沿岸都市・港に到来する以上、港を持つため地方都市には国民党勢力の影響が当時比較的に弱く、台北では失われつつあった「日本」がまだまだ多く残っていた。台湾の日本経験を体験したことのない著者は、中央（台北）と地方（南投）の差異において、「日本」を戦後知らず知らずに追体験してしまったこととなる。

また、台湾内部の多様性についても、「下港人」という、北部で用いられていた中南部住民への蔑視的呼称が紹介され

ている。北と南の差異がばやけてくるのは、南部農村（漳州系が多い）から台北（泉州系が多い）への出稼ぎ労働が六〇年代に本格化したことによると著者は分析している。近代化に伴う内部均質化作用は、日本の高度成長期や大陸中国の現在にも通じた現象である。普遍性を意識する人類学に身を置く著者の記述からは、モダニゼーション等の普遍性の眼差しが強く存在していることが感じられるため、文章内容は台湾に不案内な読者にも十分わかりやすい。

この第一部に特徴的なのは、本来悲嘆の中で描かれるであろう父の入獄（しかも行き先は火焼島）がソフトなタッチで描かれ、読者を悲観的にさせないことである。そして、現在の主流の歴史記憶とは異なる歴史記憶が、当時の大状況にも接続した分析とともに、しっかりと記されていることである。台湾現代史叙述のオルタナティブとして評するのは言い過ぎであろうか。読者の判断を仰ぎたいところである。

次に第二部の紹介に入る。第二部では、ひよんなことから結ばれた人類学の縁が著者の人生を大きく変え、台湾大学を卒業した後、ハワイ大学に留学、そして博士論文完成に向けたニューギニアでのフィールドワークを実現させ、長年の研究を結実させていく様子が描かれている。興味を惹かれるのは調査テーマが、現地少数民族を直接の対象とするのではなく、「中国」とは縁遠いイメージのニューギニアにおける華人社会を正面に据えたことである。一見奇を衒ったテーマにも見えるが、内部多様性に生きる台湾で「外省人―本省人」の二元論には回収しえない「周縁」を生きた自らの人生経験がある意味ディアスポラ化しているようにも見えるニューギニア華人社会への著者の関心を、問題認識の深層において増幅していたことは言うまでもあるまい。

著者の華人を捉える目は幾重にも重層化している。そして、学問上の分析装置として著者が重視したのが「科学」である。この「科学」とは、サイエンスと

しての「科学」である以上に、いわゆる「徳先生和賽先生」としての「科学」ではなからうか。著者は、パイワン族の子どもが年少者を年長者より重視していることを踏まえ、考え方がその正反対である中国文化のあり方をこう批判している。

私は、中国文化が子どもをいかに深く洗脳しているかということ初めて認識した。これに対して、「化外」の少数民族の子どもはものの考え方が無邪気で儒家思想に毒されていないかった。（一四六頁）

著者はまた、胡適中央研究院院長（当時）が署名捺印した辞令を大切に保管しているという。以上の叙述の中に、著者の「科学」に対する深遠な想いを感じざるにはいられない。五四精神という意味において著者はまた、日本式の制服の着用を拒否したがために退学させられた父吳坤煌の後継者にほかならない。

しかも、著者の科学精神は、一九世紀

型のヨーロッパ中心の近代主義への批判も内包している。第二部の締めくくりの言葉は鮮烈である。

西洋の人類学は、人類を永久に変化しない各「色」の人種に分けたが、こういって後進的で科学に反する考え方が、今に至るも一般の人々の信じて疑わない基礎となつていたのである。誰もが「人種」とは確立していて変わることはない生物学的現象であるかのようになっているが、実はエスニック・グループの形成は社会・経済・政治といった要素に左右されるということには気づいていない。…(略)…現代の「民族」の分類はすべて政治に奉仕するための便宜上のものにほかならない。しかし人々は、民族や種族や文化のアイデンティティという名分のもとに互いに争い、休むことを知らない。何ともやるせなく意義のないことと言うよりほかにない。(二四四頁)

著者のかかる思考は、その萌芽を第一

部にも十分発露させている。著者にとつて人類学とは、少なくともその結果において、著者の台湾経験の「科学」的理解だったのではないかと思われてならない。自立的に見える土着民の生活観念も、伝統というハードに西洋近代というソフトが起動することで変容してきたという著者の考察に触れると、九〇年代から二〇〇〇年代にかけて、台湾研究——というより地域研究全体においてであったが——であれだけ流行ったアイデンティティ研究とは何だったのか読者は自問を迫られよう。モダンゼーションの影響から完全に無関係な人間などいないことを敏感に読み取る著者は、少数民族の心性の中にすらモダンを読み込んでみせる。その眼力は自らの「台湾経験」が土台となつていることは言うまでもあるまい。

最後の第三部は、人類学者として名を成した著者の、八〇年から九〇年代に至る足跡が描かれている。「歩みを止めることを知らない」(二八頁)人類学者の

「さすらい流れ歩く旅」(同頁)には二重の理論的意義があると著者は言う。一つは郷里を離れる物理的さすらい、もう一つは自らの思考方式を離れる思想的さすらいである。そして、大陸中国、ヨーロッパ、京都とさすらい続けた後、久しぶりに戻った台湾の中に郷里を見出せなくなってしまうという結末で本書執筆のペンは置かれている。

この第三部では著者が一時期寓居した京都岩倉の思い出も詳細に綴られている。著者の印象に強く残つたのは、日本の秩序と静寂さである。昨今の日本では、グローバルゼーションへの不安ゆえか、伝統文化や「日本らしさ」の類を見つけてきては、官民間わずなり構わず「これが日本」と吹聴して自らを安心させている。その一方で、そこに潜む意味などには関心を向けたがらない。しかし本書では、秩序の背景を分析した結果として教育の重要性が強調されており、「日本」という局所の分析から一般性の高い結論が導き出されている。しかもそれが、中国文化への厳しい自己批判とと

もに展開されるため、ことばに深さと広がりが生まれている。自己参照的な意識の中で筆者によって行われる日本評価に垣間見えるのは、五四精神の延長線上にある「自己を見つめる厳しい視線」ではなからうか。

以上、三部の簡単な紹介とともに、本書への評者の「読み」を説明してきた。どこに行こうとも「本地人」（地元の人間）にはなりきれぬ著者にとり、台湾に故郷を見いだせなくなるところで話が終わっているのは非常に示唆的であるように思う。アイデンティティの重層性に生きる著者は、一九八七年という戒厳令解除の年、つまり「民主化の季節」の開始時に台湾に二〇年ぶりに戻ってきた。そのとき、「民主化」の果てに、島内のアイデンティティのありようを「四大族群」などと単純化しては総統選挙の集票資源に変えてしまうエスニック・ポリティクスがやがて出現しようとは果たして予想しえたらうか。そして、今なおアイデンティティ研究とやらの躍起となつ

ている台湾研究者は少なくない。賞味期限の長くはない研究に、膨大な人的資源と時間を投入することどこまで重大な意義が存在しているのか。今の評者には解せない。

「台湾の悲哀」とはもはや、「アジアの孤児」としての悲哀とは言えまい。戦後の冷戦構造によって政治史の磁場が強く働きすぎたために、政治の関与のみでは解決不可能な問題までが解決可能だと思われたこと、そして、アイデンティティの固定化ではなく、台湾社会全体にとつての近代／現代のあり方こそを全面的に模索すべきであったのにそうならなかったことにこそ、悲哀を感じてならない。本書は悲哀のありかを、湿りつ気のない明るい語調でさりげなく読者に届けてくれる。明るいからこそ逆に、読後に訪れる現代史への寂寞たる想いはなかなかやるせない。だが、それを乗り越えていく著者の豊かな人生経験と強く深い精神は読者を打つことにならう。翻訳の良さもあつて、なんとも奥行きを感じさせる好著に仕上がっている。